県中教研
美術部会だより

第 37 号

発 行 日　令和4年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
　富山県中学校教育研究会
編集責任者　伊勢威知郎
題　　字　金山　泰仁　先生

美術科で育成する資質・能力

主任指導主事　加藤　　豊

若い頃、美術科担当でありながら、何のために美術の授業があるのだろうと疑問に思ったことがあります。答えが出ないまま、生徒が楽しんで創造活動に取り組むことを目指し、作品づくりを中心に授業を展開していたことを思い出します。

今回の学習指導要領の改訂に伴い、「教科の目標」に、美術科は何を学ぶ教科なのかが明示されました。その中で、「感性や想像力を働かせ、造形的な視点を豊かにもち、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成すること」を一層重視するよう記載されています。そして、育成を目指す資質･能力が、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理されました。つまり、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わることができる生徒の姿を念頭に置いて、育成を目指す資質・能力が具体的に示されたわけです。その姿とは、余暇に作品を制作したり美術館で鑑賞に親しんだりすることや、ものを選んだり飾ったりするときに形や色彩に思い入れをもつこと、紅葉や夕日等の自然の造形を見て美しさを感じ取り、写真に残すことなど、心豊かな生活を形成する姿です。

各題材や各授業でどのような資質・能力を身に付けさせるのかを明確にし、身に付けた資質・能力が将来どのような力につながるかをイメージすることは、３年間を見通した年間計画を考える上でとても大切になります。また、身に付けるべき資質・能力等を生徒自らが理解することも、自分の学びや成長を実感する上で大切だと考えます。

美術の学習を通して育成すべき資質・能力が着実に身に付き、全ての生徒が心豊かに生活することを願って、今後も美術教育の研究と実践を推進していきましょう。

（西部教育事務所）

新学習指導要領の全面実施に向けて

部長　伊勢威知郎

今年度（令和３年）５月、『はらぺこあおむし』の作者で世界的な絵本作家のエリック・カール氏が91歳の生涯を終えられました。

エリック氏が平成29年に来日した際、インタビューの中で「あなたは、なぜこんなにも色鮮やかで、ユーモアにあふれた絵本を制作できるのですか」という質問に、次のように答えています。

「私は幼少期、戦争で辛くて悲しい体験をした。大人になり、私は絵本を通して、その悲しみを喜びに変えている」。

今年度、新学習指導要領が中学校で全面実施となりました。生徒を育成する資質・能力等について、学校現場では、改めてその重要性を感じるとともに、更なる授業改善に向けて研修を続けているところです。美術科においては、主体的で創造的な表現の学習を一層重視しています。中でも「主題を生み出すこと」や「生徒自らが強く表したいことを心の中に思い描き、豊かに発想や構想をすること」が重点とされています。生徒の表現方法や作品の種類は様々ですが、冒頭のエリック氏の言葉になぞらえると、中学生という発達段階を考えた場合、思春期特有の悩みや葛藤、不安といったネガティブな主題も生徒が今後前向きに生きていくための作品づくり（鑑賞も含む）の中で昇華していけるのではないでしょうか。

現在、AI（人工知能）等の発達により、物事の価値や心のありようが急速に変化しています。時に戸惑うこともあるかもしれません。しかし、これからも人間らしく、心豊かな生活を創造していけるように、また、生徒たちの希望あふれる未のためにも､美術教育を研究･実践していきましょう。

（富・月岡中）

第65回中学校教育課程研究大会美術部会

富山地区
富山市立呉羽中学校

山本淳教諭による「空間や遠近感のある写真を撮ろう」の授業は、感染症拡大予防対策として参観人数を減らし、ランチルームで行われた。授業は、空間を感じさせる工夫の感受をねらいとし、班ごとに意見を交わしながら作品鑑賞を行うものであった。生徒は、教師が用意した浮世絵や油彩画、素描といった多様な作品を縮小印刷したマグネットカードをボードにどんどん貼り付けていた。より空間を感じられる工夫を探そうと、話合いを通して貼る位置を変更させながら、集中して鑑賞をしていた。鑑賞後の発表による意見の共有や空間表現の工夫のまとめにより、今後の制作活動に空間表現への意識が養われることが期待できる学習であった。

授業後の協議では「全作品がボード一枚に収まり、手軽に動かしやすく、比較しやすい」「まず個人の意見をもたせ、自分なりの根拠をもたせながら語らせたい」等の意見が出された。

木倉泰央指導主事（東部教育事務所）からは、「導入で鑑賞の視点をもたせたこと、わくわくする作品との出会いが図られたことは、主体的に学習に取り組む要因となった」「ICT活用で、より深く鑑賞することが期待できる」「線や形等の言葉を意図的に使わせて発言の根拠にすることで、より深い学びとなる」等の助言をいただいた。また、「知識・技能の力は『習得』、思考力・判断力・表現力は『育成』、主体的に学ぶ力は『寛容』によって身に付く。じっくり繰り返され、子どもの中に学習の楽しさがじんわりと感じられることで、生活の中に美術の視点を持つことができ、生涯を通じて主体的に学ぶ力となる」と教えていただいた。ねらいに沿った視点をもたせ、繰り返し丁寧に学ぶ大切さについて考えさせられた研究大会だった。

澤田　良子（黒・清明中）

西部地区
高岡市立南星中学校

中野遥教諭による「思いを形と使いやすさに～焼き物の制作～」の授業は用と美の調和を考えて構想を練る力を身に付けさせる題材であった。

本時は、タブレットを利用して、アイディアスケッチを相互鑑賞し、構想を深めて制作を進める展開であった。生徒はタブレットを利用することで、席を動かずに互いの作品をじっくりと見ることができており感染症予防対策にもなっていた。後半は、交換した感想を読んだ後、中野教諭が自作した陶芸の制作映像で手順を確認したり、アイディアを練り直したりする姿がみられた。

部会協議①では、〇相互鑑賞後の意見交換の方法や内容について、〇構想を練る段階における教師からのアドバイスの方法について、〇ICTを活用する場面やメリットについて、協議が行われた。加藤豊主任指導主事（西部教育事務所）からは、〇指導事項を踏まえた学習指導、〇表現と鑑賞を関連づけた指導計画、〇研究主題の具現化を目指した学習評価について助言をいただいた。

部会協議②では各自のICT活用の実践例を持ち寄り、「ICT機器の活用について」グループ協議を行った。授業の振り返りに活用する例や写真を活用する例、資料づくりに活用している例など各グループで様々な実践例が紹介され、その内容を全体で共有した。加藤豊主任指導主事からは、「A表現」及び「B鑑賞」におけるICTを活用する際のポイントや活用例を紹介していただいた。今回の部会協議②でのグループ協議は、美術科教員が複数配置されている学校が少ない中、貴重な情報交換の場となった。また、若手教員の悩みに応える機会にもなるため、来年度もグループ協議を行ってほしいという要望も聞かれた。

濵田　信子（氷・北部中）